

當然の歸結

日本は当然の帰結として、主義樹立の上からは、却つて五
月蠅くなくて良いと云ひ得る。元々歐米人の考へ方は、西は
西、東は東、無色は無色、有色は有色で區別を置きながら、利
害問題となると、白人國の勢力を利用して東洋を壓迫せんとするから其處の問題が起き、今次
に於ける日支問題も、列強と云ふ大に歎くべきであるから、其の責は當然支
掛けで、日本に嘲撃せられてゐるのであるから、その方針を執る

を解釋するのに意見が異い、遂にに監督外の強國まで引張り込んで問題を紛糾せしむるやうでは、事情の全く異つた東洋と西洋とは、結局喧嘩分争をせねばならぬこととなる。

則ち、今次の日本船退も、其處に見極はめをつけた處にあるのであるから、先づ行く處に行き、落着く處に落着いた形である。經濟上のボイコットや、南洋群島の委任統治問題は、今後は廢されてゐるが、是等も實力で片付けて行けば行けるものであるから、今まで憂慮する事でも

但知西雨時華

所行
四街
六七六〇
電話
郵便
西日

國際聯盟勝選に際し
大詔煥發 さる

相手ふ事十有七ヶ月、遂にその所見寄れられざるに至つて帝國は斯乎轉覆を難脱して以て獨自の所信に迷走するに至つた。而して帝國政府が慎重審議三月二十七日之が正式通告に關する手續を完了するに至るや、是くも我が天皇陛下に於かせられては大詔ノ煥誠し給ひて帝國の大理想と國民の進路を顯示し給ふた、拜承するだに長れ多き極みである。今在舊帝國總領事館の接受したる所によつて讀者と共に之を拜讀三思し、以て大御心に副ひ奉るべきな誓ひ奉らなければならぬと信すふ次第である

の遂行に
い進せよ

四

書詔

求シテ止マス之レヲ以テ平和各般ノ企圖ハ
向後又協力シテ變ルナシ今ヤ聯盟ト手ヲ分
チ帝國ノ所信ニ之レ從フト雖モ素ヨリ東亞ニ
偏シテ友邦ノ好ヲ構ニスルモノニアラス愈
々信ヲ國際ニ厚クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スルハ
えどもトコロナリ

變ニ際會シ帝國又非常ノ
止ニ舉國振張ノ時ナリ
ヲ體シ文武丘ニ其職分ニ
務ニ淳勵シ向フトコロ正
ヲ採リ協力邁往以フ此世
考ノ聖獻ヲ翼茂シ誓チク

協議の結果 帝國政府の通告文

荒息を
掃はれず
質實剛
として帝國
水に在らざ
喚起し、
混乱し、
なる事、指
保ル律す
那の如き
する場合
きである
ヶ月に亘
識せず、
的考察に
務は財論
國との間
至り、不
の採擇せ
極更平
精神は無
又その若
藏氏は
聯盟脱退機と、日本は亞細亞聯盟
確立の使命あるものである
聯盟脱退は要するに日本の使命遂行上
聯國一致の全力を發揮する必要に併さ
らない
と言ひ、又國民同盟總裁安達謙
聯盟脱退機と、日本は亞細亞聯盟
確立の使命あるものである
聯盟脱退は要するに日本の使命遂行上
聯國一致の全力を發揮する必要に併さ
らない
決に當つて眞に平和の確立を求むる調停會
よりはむしろ實行不可能なる理論に捉はれてゐるものたるは明にして聯將軍の紛争
を避けるよりはむしろ學理的論争に終始せるものなり
以上の理由により帝國政府は極力恒久平
和の確立を計るべき原則に關し、聯盟と
愈々異なつに於するものである以し、最早何等
等聯盟と協約の餘地なきに依り聯盟も脫
退すべく、茲に聯盟規約第一條第三項の
規定に従ひ右通告をなすものである

サンタク港に於ける 邦人殺人事件の後報

喧嘩の原因は密輸入
同志の金の問題から

邦人最初の醫大入學者

あり、今日不景氣の異常に單に單に書開
紙上の廣告題旨が讀んで新くまで奮
さ離して祖國を想ふその精神は世界廣し
陰謀は未然に發覺し事なきを得
たる意い講演である、これあるが爲めに
彼の選擇三勇士も喜んで死地につく事
ある處であるが、昨日サン
トス市より歸聖せる岸本氏の語
報道せる處であるが、昨日サン
トス市より歸聖せる岸本氏の語
る處に據る。

場所はサントスで最近開

業した「あけぼの」で云ふ小料理

間に及ばず沙汰があり、相手の一

捕縛され、今は小笠原、坂本英

人を死に至らしめたる事件のあ

つた事は其の當時直ちに本紙の

近く豫審廷に廻はるゝ由で

源君は八〇、六點で卅六番共に

報道せる處であるが、昨日サン

トス市より歸聖せる岸本氏の語

る處に據る。

サントスで最近開

業した「あけぼの」で云ふ小料理

屋の一室で、二十日の夜十二時

頃から阿部、坂本、高田事小笠

原外二名、都合五名で一杯飲ん

での場句が喧嘩となり、平常道

近く内地各都市に開催の伯國原

料品紹介の見本市に出品の各種

選擇準備中であつたところ、こ

ドミロ將軍を招待し一應閲覽に

供した

明君、他は川原潔君だ、正明君

る、一人は北バラナで盛んに活

動してゐる氏原彦馬氏の子息正

学への合格者が發表された、こ

の合格者の中に二人の同胞があ

る、一人は北バラナで盛んに活

動してゐる氏原彦馬氏の子息正

明君、他は川原潔君だ、正明君

る、一人は北バラナで盛んに活

動してゐる氏原彦馬氏の子息正

